

東大現代文解説

Anchor

平成28年度 第一問

収録

ver. 1.5



初めに.....	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	5
平成28年度 第1問	7
解答例	7
本文解説.....	8
設問解説.....	9
設問（一）	9
設問（二）	14
設問（三）	19
設問（四）	23
設問（五）	28
最後に	42
引用文献・著作権表示.....	43

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければいけないということだ。言い換えれば、問題文に書かれていない専門知識だけを根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、問題文に根拠を求めるということは、筆者が何を伝えたいかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えなかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければいけないということだ。論理的に考えるだけが、現代文の妥当な解答へと向かう道である。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、〈虎の巻〉と〈各年度問題解説〉から成り立っている。〈虎の巻〉では、各年度の問題に共通して通用する方法

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

論について説明している。〈各年度問題解説〉では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り〈各年度問題解説〉だけを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ〈虎の巻〉を参照してから、〈各年度問題解説〉を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とすることが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というのは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてこの教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。もちろん、論理性を欠いてもいけな

い。時折見られるような、解答に必要な要素をただ連ねただけで、論理のつながりを無視した文章もいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、 Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学がWebページで公開している「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章を読むことで、東京大学がどんな能力を測ろうとしているのかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このような東京大学の示す方針はAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

1. 文章を筋道立てて読みとる読解力
2. それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。(引用終わり)

平成28年度 第1問

——内田樹「反知性主義者たちの肖像」——

解答例

設問（一）-1	自らの知的枠組みを刷新することを厭わず、他人がもたらす未知の言説を傾聴し、その理非の判断の代理としてまずは納得感を確かめられる人。(65字)
設問（一）-2	自らの知的枠組みを刷新することを厭わず、他人がもたらす未知の言説を傾聴し、その理非の判断を納得感によって確かめられる人。(60字)
設問（二）	反知性主義者は、自説は例外なく真理であると信じ込んでおり、他者による理非の判断に照らして自分の知的枠組みを刷新できないということ。(65字)
設問（三）	反知性主義者が理非の判断を他者に委ねないことは、集团的叡智として働くべき知性の営みから他者の存在を疎外することに等しいということ。(63字)
設問（四）	他者の行動を誘発することを触媒として、情報収集から合意形成までを担う集合的叡智を活性化し、集団全体の知的パフォーマンスを高める力。(65字)

知性とは、属人的なものではなく、集団の知的活動を活性化する力だと定義すると、身体反応を真理性の判断に代えることができず、

設問（五）-1 自分の知的枠組みを刷新することもなく、他者を集団的な知的営為から疎外する人間を、反知性的だと正しく炙り出せるということ。
(120字)

<解答2-1（論理の循環を強調）>

筆者の人物鑑定は「自らの知的枠組みを刷新し、他者の行動を誘発しながら、集団の知的活動を活性化する力」という自らの知性の定義にのみ依拠しているので、「他者を集団的な知的営為から疎外する人間が反知性的」という判断は論理的に誤り得ないということ。
(120字)

設問（五）-2

<別解2-2（筆者自身が再帰的に批判されていることを強調）>

筆者は「ときには他者の真理性の判断も受け入れて自らの知的枠組みを刷新し、集団の知的活動を活性化する力」を知性と定義しながらも、その独自の定義にのみ基いて他者が知性的であるか否かを判断しているため、反知性的であると言わざるをえないということ。
(120字)

本文解説

久々に、ひどい問題が出たものだ。いや、一周回って、すばらしい問題なのかもしれない。どこまで俯瞰的にこの文章を読むかで、この文章にこの傍線を引き、この設問を出した人の意図をどう推し量るかが変わる、奇妙な問題であった。そうい

う意味では、一周回っても、受験問題としてはあまりよろしくないともいえる。例年になく、最後の問題は別解の多い問題になっているのはそのためだ。

またもう一つの特徴は、全体として情報量が少ないことだ。情報量が少ないのに、傍線はいつもと同じだけ引かれているから、例年以上に、細かいところを丁寧に読んで、極力ミスをしないように気をつけたい。

したがって、文章全体の構造で言うべきことはほとんどない。強いて言えば、全体が二つの意味段落から構成されていることに注意できれば十分である。一つ目は、形式段落1-4で、大まかにいえば、反知性主義者とは、自分の誤りを認められない人物であることが主張されている。二つ目は、形式段落5-10で、概略としては、知性は個人的なものではなく集団的なものであることが主張されている。そのそれぞれにおいて、世間一般で語られる「知性」と、著者が定義する「知性」が対比され、論が進められていく。

とはいえ、（情報量が少ないということもあり）ここで詳しい対比を展開してもしょうがないので、詳細な中身については、設問ごとの解説をしながら見ていくことにしよう。

設問解説

設問（一）

問題	「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」（傍線部ア）とはどういう人のことか、説明せよ。
解答例-1	自らの知的枠組みを刷新することを厭わず、他人がもたらす未知の言説を傾聴し、その理非の判断の代理としてまずは納得感を確かめられる人。(65字)
解答例-2	自らの知的枠組みを刷新することを厭わず、他人がもたらす未知の言説を傾聴し、その理非の判断を納得感によって確かめられる人。(60字)

構成フェーズ

- 「どういう人のことか？」という設問文に答えるためには？
- 「どういう人か」を考えるためにはどこから考え始めればいいのか？

思考の目次

読解フェーズ

- 「そのような」身体反応とは何か？
- 「さしあたり…代える」とはどういうことか？
- 「知性的な人」とはどういう人か？

構成フェーズ

虎の巻どおり、まずは設問文を見ると、「どういう人のことか」とある。「どういうことか」とは問われていない。それゆえ、この設問では、傍線部が述べていることに忠実に説明をするよりも、むしろ傍線部が指し示している人物像について広く説明することが求められていることが分かる。

次に、傍線部をみる。すると、「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」とある。この傍線部については3点考えるべきポイントがある。第一に、指示語が含まれている「そのような身体反応」というフレーズがなにを意味するのかを考える必要がある。第二に、「身体反応」が「理非の判断」に代えられるという状況も、説明が必要である。第三に、「さしあたり」という言葉のニュアンスも汲み取ることが必要であろう。

傍線部が示している人物像について広く説明することが求められていることも踏まえると、読解フェーズで検討すべき問いは以下の問いであるようだ。

- 「そのような身体反応」とは何か？
- 「身体反応」を「理非の判断に代える」とはどういうことか？
- 「さしあたり」のニュアンスは何か？
- 「傍線部が指し示している人物」は、結局、どういう人なのか？

読解フェーズ

「そのような身体反応」とは何だろうか。「そのような」が示すのは、直前の「聴いて『得心がいったか』『腑に落ちたか』『気持ちが片づいたか』どうかを自分の内側をみつめて判断する」ことである。したがって、傍線部では「身体反応」という用語が使われているものの、「身体」という言葉から連想されるスポーツのようなものではなく、むしろ、「感情や感性」のカテゴリーに属する「納得感」を意味していると考えられる。ここまでを傍線部に代入すると、「納得したかをさしあたり理非の判断に代えることができる人」とまとめられる。

次に、「理非の判断に代える」がなにを意味するのかを考える前に、そもそも目的語がなにかを確認しておこう。いったい、納得したかどうかは、「何の」理非の判断をすることに代えられるのだろうか。筆者は、この段落の冒頭で、バルトの無知の定義を引用して、未知のものに出逢ったときの反応から、知的であるかを区別できるとする主張に共感を示している。また、それを受けて、他者との対話に状況を限定した上で論を進めている。それを受けての傍線部なのだから、「未知のもの」、とくに「他者の言説」が目的語となる。ここまでをまとめると、「他者の言説に接したとき、納得したかをさしあたり理非の判断に代えることができる人」とまとめられるだろう。

それではいよいよ「理非の判断に代える」ということの意味を見ていく。まずは、「代える」とは「代替・代用」の意味であると解釈してみよう。「代替・代用」と言えば、例えば黒胡椒が手元にないのでとりあえず白胡椒を使うという場面が想定される。よって、解答の方向は「理非の判断の代理として納得感を確かめる」というものにだろう。一方、深読みすれば「代える」を「代表」の意味とも解釈できる。この文脈では、納得感でもって理非の判断をするということになる。この「代わる」の二通りの解釈は、どちらも妥当なものであり、片方に絞り込むことはできない。後者の「代表」解釈を取った解答は別解として記している。どちらの解釈をとっても共通することは、未知のものや、他者の言説に出逢ったとき、まずすることは、理非の判断ではなく、納得感を確かめることである、ということである。理非の判断ではなく、納得感を確かめるためには、筆者が指摘する通り、他人による未知の話をも門前払いせず、まずは黙って聴くことが必要になる。これは、納得感を確かめるための前提条件である。

さらに読み進めてみよう。傍線部は「知性的な人」といいかえられ、そのあと、「そのような人たちは「知的な枠組みをそのつど作り替えている」とある。そして知性は「そういう」「知の自己刷新」のことを意味していると主張される。これら全ては指示語でつながっていて、傍線部で指し示している「人」の説明となっている。ここまでをまとめると、「傍線部＝知性的な人＝知的枠組みを自分で刷新で

きる人」となる。構成フェーズで見たように、ここでは、対象となる「人」の説明が求められている以上、解答にはここまで盛り込むことが求められる。

ここまで読解した上で、解答を構成するために考える必要があるのは、「知的枠組みを刷新すること」と「納得感をまずは確かめることができること」の間にある関連性はどのようなものであるか、ということである。「知性的な人」には、「反知性的な人」が対置される。反知性的な人は、「情報や知識が加算されるだけ」と述べられている。もし、反知性的な人は、知的枠組みを刷新できないとすれば、他者のもたらす未知の命題に出逢ったとき、まずは黙って聴き、納得感を確かめることはできないだろう。せいぜい、ろくに聴きもせずに門前払いして、「間違っているもののリスト」に情報を加算することができるくらいだろう。

以上の整理から、「知的枠組みを自分で刷新できること」は「他者がもたらす未知の言説に対してまずは黙って聴き、納得感を確かめることができること」の前提条件になっていることが分かる。それゆえ、「知的枠組みを自分で刷新することも厭わず」といった付帯条件を加えることが必要になる。これまでの読解を踏まえてまとめると、「他者の言説に接したとき、すぐに理非の判断をするのではなく、自分の知的枠組みを刷新することも厭わず、まずは黙って聴き、納得したかを確認することができる人」というものになる。ここから字数を削りつつ表現を調整すれば解答ができあがる。

自らの知的枠組みを刷新することを厭わず、他人がもたらす未知の言説を傾聴し、その理非の判断の代理としてまずは納得感を確かめられる人。(65字)

他社解答例の講評

A社

答案 自説に固執せず、他人の説に耳を傾けて納得できるかどうかを判断し、自分の知的枠組みを作り替えることを喜びとする人。(56字)

Schip採点 4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

簡潔に本文の内容を反映できているものの、「喜びとする人」と着地してしまったのが惜しい。本文では、喜びという感情を感じるのかまでは読み取れない。そこで読解点を一点減点した。

B社

答案	他者の言葉を自らの身体的な実感でその当否について判断し、知的枠組みを柔軟に刷新して未知なるものを捉えようとする人。(57字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

よい答案である。簡潔に内容がよくまとまっている。

C社

答案	他人の話をわかったつもりにならず、それに耳を傾け、その内容を実感として納得できたか否かを、自らの知の枠組みが揺らぐままに内省できる人。(67字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

「他人の話をわかったつもりにならず」というのはあくまで外部目線であり、筆者が定義するところの反知性主義的な人は、自分は正しいとっていて、「わかったつもり」ではなく「わかっている」と思っている（自分では）。その点で、表現が冒頭だけ外部目線なのは違和感がある。また、「自らの知の枠組みが揺らぐままに内省」というのは本文でも述べられていないことだし、設問の要求からはずれている。最終的には、判断しないといけないのに内省で終わってしまっは解答としては不十分である。いったん真理性を留保して聴き、納得できたかで真理性の判断に代え、最後に真理だと分かれば知的枠組みを刷新する。その一連のプロセスが描き出されていない。

D社

答案	自説に固執せずに、他人がもたらす未知のものを受け容れ、自らの知的枠組みを刷新しながら、それが自分の内的感覚と適合するかどうかをもって目下の是非を判断する人。(78字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：-1点

要素は全て答えられている。しかし、長い。これでは本番の解答用紙に書き込んだときにみみずのような字になってしまう。

E社

答案	他者の言説をいったんは受容し、それが引き起こす納得や了解などの全身的な感覚を通して物事の正否を判断し、自らの知を更新し続ける人。(64字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

問題点だらけだ。この解答も「さしあたり…代える」という傍線部のニュアンスを踏まえきれていない。「納得や了解などの全身的な感覚」という部分に字数を使いすぎたのが問題であろう。「全身」という言葉の意図も不明である。「全身」と言うからには、「身体の一部」との対比が想定されるべきだが、そのような議論は本文に全く存在しない。また、後半の「自らの知を更新し続ける」という表現も、筆者はわざわざ知識の蓄積ではなく枠組みの刷新だと断っているのに、「知」ということばで曖昧にする必要はなかったはずである。

F社

答案	他者の言葉がはらむ未知のものを、既成の知的枠組みを基準に裁断せず、自らの内的感覚にかなえば受け容れて自己を新たにしようとする人。(64字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

まず「既成の枠組み」では、誰の枠組みなのか不明瞭である。既成の「一般的に共有された」知的枠組みであるとも読み得る。また、「さしあたり…代える」というニュアンスは「新たにしようとする」という表現で出ている一方で、「自己を新たに」というのは本文の「知的枠組みの刷新」からは程遠い。設問文と傍線部はうまく捉えられているのに、本文の読み損ないと、表現が不十分なので損をしている答案である。

設問 (二)

問題	「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。
解答例	反知性主義者は、自説は例外なく真理であると信じ込んでおり、他者による理非の判断に照らして自分の知的枠組みを刷新できないということ。(65字)

構成フェーズ

- 設問は「どういうことか」という問いにどう応えるか？
- 傍線部をどこから明らかにしていくか？

思考の目次

読解フェーズ

- 「この人」とはどんな人か？
- 「あらゆることについて正解をすでに知っている」と内容が重なる箇所はどこか？

構成フェーズ

設問文をみると「どういうことか、説明せよ」とある。それゆえ、素直に、傍線部を言い換えればよい。

それでは、傍線部はどうなっているか。傍線部は「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」とある。まずは「この人」とは何かを確認しなければならない。「あらゆることについて正解をすでに知っている」という文言は、そのままだですんなり表面的な意味は通じる。しかし、それでは設問にならない。ここには含意があるのだと考えるのが自然だ。よって、読解フェーズで考えるべきは次の問いだ。

- 「この人」とは何か？
- 「あらゆることについて正解をすでに知っている」という言葉にはどんな含意が込められているか？

読解フェーズ

傍線部にいう「この人」とは、この形式段落の冒頭にでてくる「反知性主義者」のことである。なぜならば、この形式段落の2文目の主語は、反知性主義者であり、これを受けて次の文も書かれ、傍線部に到達しているからである。したがって、「反知性主義者は」「あらゆることについて正解をすでに知っている」とはどういうことかを問わねばなるまい。

その具体例は、傍線部の前にある文章である。「一つのトピックについて、手持ちの合切袋から、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらかでも取り出すことができる。」という一文である。これは傍線部の意味を推測する手がか

りにはなるが、傍線部と直接対応するものではない。なぜなら、「一つのトピックについて…」の文のあとに、「けれども」とおいてから、「私たちの心は晴れることがない」とあり、それについて、「というのは」と理由が展開されているからである。接続詞にみる論理的なつながりからいって、傍線部と「一つのトピックについて…」の文章が直接対応しているということはない。

そこで、傍線部の後ろを見てみよう。そこでは、「正解をすでに知っている以上」とあって、傍線部を踏まえたさらなる論理展開がなされている。というのも「Aである以上B」という表現は、「Aを前提とするならばB」と同値だからである。したがって、この部分も傍線部の意味内容を推測する手がかりにはなるが直接的な材料にはならないことに留意すべきである。その上で、そこをみると、「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」という態度であることが分かる。

以上で、反知性主義者の特徴が二つ抽出された。「自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらかでも取り出すことができる」というものと、「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」というものである。この二つをうまくまとめれば解答の大部分を構成できる。ただし、気をつけておかななくてはならないのが、「『あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない』というのが反知性主義者の基本的なマナー」という一文である。ここでは、反知性主義者の基本が、「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」方におかれている。傍線部の主語は「反知性主義者」だったのだから、解答も「ことの理非の判断を私に委ねる気がない」方に重点を置いて書くべきだろう。筆者自らが「基本的なマナー」とまで言ってくれているのだから。

最後に、傍線部に今一度戻っておこう。「反知性主義者は、あらゆることについて正解をすでに知っている」とはどういうことなのかを説明しなければならない。データやエビデンスを取り出すのは傍線部から引き出される具体的な行為であり、理非の判断を委ねることがないのは傍線部の結果である。傍線部それ自体を説明するには、傍線部を自分で言い換えなければならない。反知性主義者が理非の判断を他者に委ねることがないのはなぜだろうか。「『あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます』というようなことは 残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。」という一文に着目してみよう。反知性主義者は、自分の語ることはすべて真理であると信じ込んでおり、他者の反応によって自分の語ることの真理性がゆるがされることを想定していないのである。自分の語ることの真理性がゆらいでこそ、自分の知的枠組みを問い直し、刷新することが可能となる。その基本的な「知性」の条件（筆者によればだが）が欠けているのが反知性主義者なのだ。その結果として、他者に理非の判断を委ねることはないのである。ここまでをまとめると解答になる。

反知性主義者は、自説は例外なく真理であると信じ込んでおり、他者による理非の判断に照らして自分の知的枠組みを刷新できないということ。(65字)

他社解答例の講評

A社

答案 反知性主義者はその豊富な知識や情報から得た真理を唯一絶対であると盲信して、一切の批判に耳を傾けないということ。(55字)

Schip採点 3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

まず、表現上の問題で「得た真理を…盲信」という表現は、反知性主義者が真理だと信じ込んでいるものが真理なわけではなく（だとすると複数の真理が対決することになってしまう）、真理ではないものを真理だと信じ込んでいて、真理に到達するために対話をするのだということがうまく伝わらないので避けるべきである。ここでは、傍線部にそのまま対応していないので構成点を1点減点した。

また、批判に耳を傾けないとはつまりどういうことかということ、柔軟に知的枠組みを刷新しながらともに真理を探究しないということだから、ここも尻切れトンボとなっている。そこで、表現点は加点していない。

B社

答案 反知性主義者は自己の信ずる真理性を絶対的なものと思い込み、他者の判断を考量する余地は全く持たないということ。(54字)

Schip採点 4点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

概ねいい答案だが、傍線部自体の説明をする必要があった。そこが抜けているのが惜しい。傍線部そのものの説明がなされていないので構成点が1点減点された。

C社

答案 自説を根拠づける豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、自らの思考枠がすべてに妥当する絶対性を備えていると思い込んでいること。(65字)

Schip採点 3点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：-1点

まず「知的枠組み」を「思考枠」という別な概念に置き換えるのはやめよう。筆者じきじきに「身体感覚」の大切さをいって、それを知性と絡めているのだから、「知的」を「思考」に置き換えてはだめである。また、「思考枠が…絶対性を

備えている」というのは日本語が不明瞭である。これらの欠点により、表現点が1点減点された。

D社

答案	反知性主義者は、自らの知的枠組みを固定して、過剰なまでに豊かな自らの客観的な知識に基づいて、自説の真理性を確信し、理非の判断を下し終えているということ。(76字)
----	---

Schip採点	3点	読解点	2点	構成点	2点	表現点	-1点
---------	----	-----	----	-----	----	-----	-----

要素は全て入っているにも関わらず、ダラダラと長く75字を超えてしまっており、答案用紙に収まりそうにない。「真理性の確信」と「理非の判断を下し終えている」はどちらか一つで十分だっただろう。よって、内容面では問題はないが、表現点を減点した。

E社

答案	すべてのことについて自分の判断こそ絶対の真実だと思い込み、他者の見解によってそれに修正や検討を加える姿勢を一切もたないということ。(65字)
----	--

Schip採点	4点	読解点	1点	構成点	2点	表現点	1点
---------	----	-----	----	-----	----	-----	----

本文の誤読が見られる。知性ある人が他者の見解によって修正するのは、知的枠組みであって、自分の判断そのものではない。それゆえ、後半部分で読解点を減点せざるをえない。

F社

答案	反知性主義者は、自己の枠組みの中の知識や情報に基づく自らの理非の判断を絶対視し、その外部にあるものの意義を認めないということ。(63字)
----	--

Schip採点	2点	読解点	1点	構成点	2点	表現点	-1点
---------	----	-----	----	-----	----	-----	-----

設問には応えようとしているが、本文の誤読と表現のミスがみられる。まず、枠組みは知的枠組みであることを明示しよう。ここでは、知性の話をしているのだから。それゆえ、読解点を1点減点した。また、「枠組みの中の知識や情報」という表現も不適切。枠組みを構成するのもまた知識や情報なのだから。さらに、「外部にあるものの意義を認めない」という表現も「意義」という新しい概念が導入されているので本文の内容とずれてしまっている。ここで表現点を1点減点した。

設問（三）

問題	「『あなたには生きていない理由がない』とされているに等しい」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。
解答例	反知性主義者が理非の判断を他者に委ねないことは、集団的叡智として働くべき知性の営みから他者の存在を疎外することに等しいということ。(63字)
思考の目次	構成フェーズ <ul style="list-style-type: none">・ 設問文はなにか？・ 等しいとはどういう形式を意味するか？ 読解フェーズ <ul style="list-style-type: none">・ 傍線部はなにと比較されているか？・ 「生きていない理由がない」とはどういうことか？

構成フェーズ

設問文をみると「どういうことか、説明せよ」とあるので、丁寧に言い換えよう。

次に、傍線部をみよう。「『あなたには生きていない理由がない』とされているに等しい」とある。ここで、文末の「等しい」に着目しよう。等しいというのは「A=B」という形式をもっている。それゆえ、傍線部に明示されていない「A」があるはずである。それはなにかを問わなければならない。ついて、「B」は「『あなたには生きていない理由がない』とされている」と会話文の入った文章になっているので、ここも適切に言い換える必要があるだろう。よって、読解フェーズで考えるべき問いをまとめると以下になる。

- ・ 何が「あなたには生きていない理由がない」と言われることと等しいのか？
- ・ 「あなたには生きていない理由がない」とはどういうことか？

読解フェーズ

まずは、「A」の部分を同定しよう。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しようと、それは理非の判断に関与しない」というのが、傍線部の主部であり、「A」

の内容になる。ここは、それまで論じられてきた、「ことの理非を他者に委ねる気がない」ことを意味している。

それでは、「『あなたには生きていない理由がない』と言われていた」とはどういうことか。ここを説明するのが最も難しい（恐らくこの問題全体を通して）。「生きていない理由」とはなにか。ここでは、生きていない「意味」ではなく、「理由」という言葉が使われている。では、生きていない「理由」とはなにか。そもそも「理由」とはなにか。理由とは、結論を導出するのに必要な根拠のことである。結論は「生きていないこと」そのものである。生きていないことを成り立たせている、その前提はなにか。

このように問うていくと、傍線部の後を見ていく必要があることに気付く。「知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだ」と私は思っている」とある。また「知性は『集合的叡智』として働くのでなければ何の意味もない。」ともある。ここにヒントがある。

「生きていない」という存在の事実そのものは、根拠なしに成り立つかもしれない。しかし、その存在が認識されるかどうかは、他者が必要になってくる。それゆえ、もし筆者が述べるように、知性が集団として発動するものなのだとすれば、理非の判断をすることが知性的な営みに参加することであり、ひいては共同体に属することの証明になる。共同体に属することが認められない者は、生物学的には生きていないかもしれないが、認識論的には生きていないことにはならない。というのも、生きていない理由がないからだ。生きていない理由として、共同体に属していること。それがないという事態のことを「疎外」という。

なかなか本文から読み取るのは難しい問題であった。ただし、背景知識がなくても、記号論的な同値や対比といったものをうまく使いつつ、それを踏み台として、意味論的な領域に飛翔できれば、解答のよすがは掴めたのではないかと。いずれにしても差がつく問題であったらと思う。

反知性主義者が理非の判断を他者に委ねないことは、集団的叡智として働くべき知性の営みから他者の存在を疎外することに等しいということ。（63字）

他社解答例の講評

A社

答案

知性に乏しい人間は真理の解明にはまったく役立たず、思索や批判をしても意味がない、と宣言されたことになるということ。（57字）

Schip採点 1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

まず、傍線部の「あなた」は「知性に乏しい人間」に限定されているわけではない。それゆえ、構成点を1点減点した。また、ここでこのように知性という言葉を使うことは、筆者の「知性」「反知性」の定義が分かっていないことになる。というのも、ここでは、一般的に思われている知性ある人、筆者の言う反知性主義者が、宣言する側だからである。さらに、「思索や批判をしても意味がない」だけで「生きている理由がない」ということを示すためには、知性は集団的なもので、そこへの参加ができないというロジックが別に必要である。以上の観点から、読解点は1点もつけることができない。

B社

答案 自己を絶対化して他者の判断を無化する反知性主義者の言動は、人々の生きる力を否定して衰弱させる機能をもつということ。(57字)

Schip採点 2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

「生きている理由がない」とはなにかと問われて、「生きる力を否定して衰弱させる機能」と答えるのでは説明として不十分である。生きることは、他者とともにあることによって成り立つという要素が不可欠である。よって、読解点は与えられない。

C社

答案 自分の思考が他人に無視されることは、他者と応答し合いながら知を生成していくという人間の生のあり方が否定されるのと同じだということ。(65字)

Schip採点 5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

要点を簡潔にまとめたよい答案である。このような答案が書けるように、受験生のみんなも努力を重ねてほしい。

D社

答案 自らの下した理非の判断を絶対視し、他人の思考や判断を受け容れない反知性主義者の態度は、他人の存在そのものを否定していることと等価であるということ。(73字)

Schip採点 3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「他人の存在そのものの否定」が集団として働く知的営為からの排除に基盤をおいていることを指摘しないと本文読解としては不十分である。そこで読解点を1点減

コラム：ホフスタッターによる「反知性主義」の分析

「反知性主義」という言葉が最近流行しているが、その意味が人口に膾炙しているとは必ずしもいえない。反知性主義とは、本文でも紹介されているリチャード・ホフスタッターの『アメリカの反知性主義』（訳：田村哲夫、みすず書房、2003）において導入された概念である。

アメリカは人工的な国家である。アメリカは、ピルグリム・ファーザーズと呼ばれる主にイギリスからの移民に起源を持つ。そして、アメリカに次第に社会ができるに連れて、イギリスから独立しようとする機運が高まった。こうして独立戦争が起きる。独立戦争でイギリスからの独立を獲得したアメリカは、西欧でしきりに論じられていた「社会契約論」の思想に影響を受ける形で、国家の形を決めた。このようにしてアメリカは人工的にあるいは意図的に一から国家の形を決めていった。このように出来上がった国家には、西欧における貴族といった存在を欠いていた。西欧における貴族は読み書きができる人々であり、ハイカルチャーの担い手あるいはパトロンであった。しかし、アメリカにはそのような存在はいない。西欧にあるカルチャーがアメリカにはなかったのである。今では想像しにくいだろうが、アメリカ人は二度の世界大戦に勝利する前までは、西欧にとってはただの田舎者だったのである。このような事情もあり、アメリカで重要視されたのは、ハイカルチャーの形成ではなく、産業を発展させ、田舎者を脱することであった。つまり、学校で役に立たない勉強をするよりも、実際に現場に出てビジネスをすることがアメリカに最も必要なことであった。今でもビジネスといったらアメリカというイメージがあるのではないだろうか。ビジネスにおいて重要視されるのは、実用性である。それに対して、学問とは「非実用的」であることが多い。こうして、アメリカにはその建国の当初から「反知性主義」の下地があったというのがホフスタッターの見立てである。

「反知性主義」は様々な仕方で現れるためにかなり混乱した概念であるが、知性主義に反感をもつ人々の拠り所であるという点は共通している。いわば知識人の権威に対する市井の人々の考え方なのである。ホフスタッターによれば、

私が反知性主義と呼ぶ心的姿勢と理念の共通の特徴は、知的な生き方およびそれを代表するとされる人びとに対する憤りと疑惑である。そしてそのような生き方の価値をつねに極小化しようとする傾向である。あえて定義するならば、このような一般的な公式が役に立つだろう。（p.6）

一例を挙げるならば、「それってなんの役に立つの？」という言葉に代表されるような態度である。しかし、ホフスタッターによれば、反知性主義は必ずしも悪い態度ではない。それは、知性が陥りやすい独善的な態度（権威主義）を相対化する可能性を持っているからだ。「なんの役に立つの？」という言葉は、目の前に喫緊な問題があるのにただの言語遊びに興じているようなあり方の正当な批判になる。内田樹の論考では、反知性主義のもつ役割（独善的なあり方の相対化）が知性の役割として論じられている。この意味では、ホフスタッターのいう反知性主義と内田樹のいう反知性主義には違いがある。ただし、ホフスタッターも内田樹も強調するのは、自らを振り返り、そのあり方を常に更新できるように開いておくことである。知性は、ユーモアや遊びごころ-集団を活性化させる力があってこそなのである。（ホフスタッターが反知性主義の萌芽としてまず注目するのはアメリカにおける宗教のあり方であるが、ここではわかりやすくビジネスの例をとった。）

点した。また、字数が65字を超えているので表現点は与えられない。

E社

答案	自説のみが正しく、他者の見解は一切不要と考えることは、他者の思考や判断、ひいてはその存在そのものを否定することと同じだということ。(65字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

これもD社の解答と同じく、存在そのものの否定とはどういうものなのかにまで踏み込むことが必要である。そこで読解点を1点減点した。

F社

答案	自他の関わりにおいて生を営むのが人間なのに、自己の考えが他に何の影響も及ぼさないなら、自己の存在意義自体が否定されるということ。(64字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：1点

本文は知性と知的営為の話をしているのに、この回答は生きる意味一般にまで話を広げてしまっている。このように過度な一般化をしてはいけない。過度な一般化をすると、本文が読めていないという点で読解点が減点され、傍線部と解答がずれることによって構成点も減点されてしまう。

設問 (四)

問題	「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」(傍線部エ)とはどういう力のことか、説明せよ。
解答例	他者の行動を誘発することを触媒として、情報収集から合意形成までを担う集合的叡智を活性化し、集団全体の知的パフォーマンスを高める力。(65字)

構成フェーズ

- ・ 「どういう力か」という設問にはどう答えたらいいか。
- ・ 傍線部全体はどのように言い換えられるか。

思考の目次

読解フェーズ

- ・ 「その力動的プロセス」とはなにか？
- ・ 知性を定義する条件とはなにか？

構成フェーズ

まずは、設問文をみてみよう。「どういう力」かとある。設問(一)と同様に、「どういうことか」ではなく、「どういう力」かとあるのだから、傍線部を素直にいいかえるよりも、それが指し示す対象をしっかりと説明することに力点を置くべきであることが分かる。(にも関わらず、傍線部をただ言い換えただけの予備校の解答例が頻出しているのはとても悲しいことである。)

次に、傍線部をみてみよう。「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」とある。それゆえ、まずは「その力動的プロセス」の内容を明らかにすることが仕事になりそうだ。その上で、それを「活気づけ、駆動させる」とはどういうことかを確認しよう。しかし、それだけで満足してはいけない。先ほど述べた通り、「どういうことか」ではなく「どういう力」かと問われているのだから、この「力」をより広い文脈の中でも考察する必要がある。傍線部のあとに、「(傍線部)の全体を『知性』と呼びたい」と筆者が述べているように、知性そのものの考察へと旅立つことなしに、「力」の説明はできないのだから。以上を総括すると、読解フェーズで考えるべき問いは以下だ。

- ・ 「その力動的プロセス」とは何か？
- ・ (「力動的プロセス」を)「活気づけ、駆動させる」とはどういうことか？
- ・ 傍線部の「力」の全体を「知性」を呼ぶということはどういうことか？

読解フェーズ

傍線部の直前をみると、「人間は集団として情報を取り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う」という一文が発見できる。これがそのまま傍線部の「その力動的プロセス」の内容となる。しかし、傍線部を素直に言い換える問題ではないのだから、この一文をだらだらと解答に書き込むことは馬鹿げている。

結局のところ、傍線部とは「活気づけ、駆動させる力」なのであるから、「活気づけ、駆動させる」とはどういうことかを明らかにし、そちらに重点をおいて解答を構成すべきだろう。その内容は、傍線部のあとにある。長いので、段落を変えて引用する。

ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思い出したり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りたくなったり、家の掃除がしたくなったり、たまっていたアイロンかけをしたくなったりしたら、それは知性が活性化したことの具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

ここから読み取れるのは、知性の条件として、「他者の行動を誘発する」ことが重要であるということである。その行動自体が、いわゆる知性的なものである必要はまったくない。「家の掃除」「たまっていたアイロンかけ」といった行動でよいのである。何でもいいが、とにかく他者の行動を誘発すること。それが知性の第一条件である。

知性には、もう一つ条件がある。それを知性の第二条件と呼ぼう。ここのヒントになる文章も、書かれているので、以下に段落を変えて引用することとする。

知性は個人の属性ではなく、集団的にしか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量できない。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。

さて、知性の第二条件とは「集団全体の知的パフォーマンス」が高まったかどうかであることが読み取れる。しかも、集団全体の知的パフォーマンスの向上にまつわる評価は「事後的」に行われることであることが明示されている。それによって、知性の全体像が明らかになる。

まずは、個人間のレベルで、知性ある人がいれば、他者の行動が誘発される。次に、集団のレベルで、知性ある人が誘発した様々な人の行動が織り合わさることによって、集団全体の知的パフォーマンスが向上するのである。この順序なのであって、逆ではない。そのことをよく心しておかなくてはならない（もちろんそもそもこの二つのステップが書かれていない解答は論外なのであるが）。

言い換えれば、「知性」のある人ならば必ず直接的に集団全体の知的パフォーマンスを向上させるとは限らないのである。それは事後的になされることにすぎない。にも関わらず、集団全体の知的パフォーマンスを向上させることが、知的にとって本質的な条件なのである。知性ある人は、自身がより活躍するのではなく、あくまで周囲に影響を与えることで、全体に影響を及ぼすのである。この関係を見失わないように答案は書きたいものである。

他者の行動を誘発することを触媒として、情報収集から合意形成までを担う集合的叡智を活性化し、集団全体の知的パフォーマンスを高める力。（65字）

他社解答例の講評

A社

答案 合意形成に向けた活発な議論を促し、新たな発想や行動を呼び覚ますような、集団の知的パフォーマンスを高める力。（53字）

Schip採点 4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

全体的によくまとまっているが、集団的な知的営為の力動的プロセスを活性化させる触媒として他者の発想を呼び覚ますという行為があるという本文の論理関係が十分に踏まえられていない。そこで読解点を1点減点とした。

B社

答案 相互に影響を及ぼすことで人々に新たな気づきと発想をもたらし、集団全体の知的活動を刺激して合意形成へと促す知性の力。（57字）

Schip採点 2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

必ずしも、知的活動を刺激することで、合意形成へと至るわけではない。集団としての知的活動のプロセス自体は、「人間は集団として情報を取り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う」で間違っていないけれども、それと他者の行動を誘発して、集団の知的パフォーマンスを高めることは独立である。例えば、アイロンがけ

をしたくなることは合意形成へと促しているわけではない。よって、この読解ミスにより、読解点は与えられない。

C社

答案	集団内でのやりとりを通じた合意形成に至る過程で、個人だけでは思いもよらぬ発想を人々にもたらし、人々相互の活発な知的活動を創出する力。(66字)
----	---

Schip採点	3点	読解点	1点	構成点	2点	表現点	0点
---------	----	-----	----	-----	----	-----	----

設問には応えようとしているが、「人々相互の活発な知的活動を創出」がいまいち。知的パフォーマンスの向上を言い換えたのだから、「創出」に限定している点が本文とは食い違っている。本文ではあくまで活性化という言葉をつかっており、これはもともと活動としてはあるが、量や質が向上する場合も含まれるはずである。「思いもよらぬ発想」という箇所も本文の内容と異なっている。果たして「家の掃除がしたくなる」ことは思いもよらぬ発想だろうか？さらに、「人々相互」という言葉がぎこちない。以上の点から、読解点が減点され、表現点は加算されなかった。

D社

答案	人間が集団として情報を得て、その軽重を吟味して仮説を立て、対処の合意形成を行う過程において、他者の知の自己刷新を促すというかたちでの影響を他者たちに及ぼす力。(79字)
----	--

Schip採点	2点	読解点	1点	構成点	2点	表現点	-1点
---------	----	-----	----	-----	----	-----	-----

長い。前半のプロセスを説明するのに字数を使い過ぎている。75字をはるかにオーバーしているので、もちろん表現点は減点される。また、「他者の知の自己刷新」は言い過ぎであろう。アイロンをかけたくなるのは知の枠組みの変更ではないだろう。そこで読解点も減点された。

E社

答案	集団において情報を摂取・吟味し、特定の仮説の下に対処法の合意を形成するという一連の動的過程を活性化し、他者の創造的な行動を促す力。(65字)
----	--

Schip採点	2点	読解点	1点	構成点	1点	表現点	0点
---------	----	-----	----	-----	----	-----	----

この答案も前半部分の指示語の説明に字数を使いすぎて要点を見失っている。触媒として他者の行動を促すことであくまで最終的には集団の知的パフォーマンスを向上させる力が傍線部の力である。また、この力が促す他者の行動は「創造的」な

ものに限定されない。よって、解答の内容が本文と食い違っているばかりか、解答の着地も誤っており、設問に答えられていない。ここで読解点と構成点がそれぞれ減点された。

F社

答案	人々の心が創発的な営みへと向かうような刺激を与え続けることで、集団全体として状況を認識し対処してゆく知的営為を活性化し促進する力。
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：-1点

「創発的」という言葉の意味を誤解して使っているのではないか。創発とは、事前には予測できないけれども、複数のアクターの相互作用によって、事後的に有意義なパターンが現象することである。したがって、「心が創発的な営みへ向かう」では意味がとれない。それゆえ、他者に新しい発想をもたらすことで、集団の知的パフォーマンスを向上するという文意が明確に表現できていない。以上の誤りにより、読解点と構成点がそれぞれ1点減点、表現点も減点された。

設問（五）

問題	「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」（傍線部オ）とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で 一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。
解答例1 ＜筆者の主張を忠実に再現＞	知性とは、属人的なものではなく、集団の知的活動を活性化する力だと定義すると、身体反応を真理性の判断に代えることができず、自分の知的枠組みを刷新することもなく、他者を集団的な知的営為から疎外する人間を、反知性的だと正しく炙り出せるということ。 (120字)

<解答2-1（論理の循環を強調）>

解答例2

<筆者の主張を客観的に、メタ的に考察するもの>

筆者の人物鑑定は「自らの知的枠組みを刷新し、他者の行動を誘発しながら、集団の知的活動を活性化する力」という自らの知性の定義にのみ依拠しているので、「他者を集団的な知的営為から疎外する人間が反知性的」という判断は論理的に誤り得ないということ。
(120字)

<別解2-2（筆者自身が再帰的に批判されていることを強調）>

筆者は「ときには他者の真理性の判断も受け入れて自らの知的枠組みを刷新し、集団の知的活動を活性化する力」を知性と定義しながらも、その独自の定義にのみ基いて他者が知性的であるか否かを判断しているため、反知性的であると言わざるをえないということ。
(120字)

構成フェーズ

- ・ 「どういうことか？」という設問
- ・ 傍線部の指示語はなにを指しているか？
- ・ 「本文全体の趣旨」はなにを踏まえればいいのか？

思考の目次

読解フェーズ

- ・ 「この基準」とはなにか？
- ・ 「人物鑑定」とはなにをすることか？
- ・ 「本文全体の趣旨」はどこまで深く突っ込むべきか？

構成フェーズ

設問文をまずみよう。「本文全体の趣旨」を踏まえた上で、「どういうことか」を説明するように要求されている。本文全体の趣旨は、後回しにして、まずは傍線部をみてみよう。

傍線部は、「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」とある。ここでは、「この基準」をまずは明確化しなければならないことが分かる。さらに、読解フェーズでは「人物鑑定を過ったことはない」とはどういうことかを深く問うていくことになる。

読解フェーズ

それでは、早速「この基準」についてみていこう。傍線部直前をみると次のようにある。「その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。」

ここでは、「Xの場合、Yとみなす」という構文が使われている。これは「Xを基準として、Yを定義する」とことと同じ意味である。例えば、「自分の悩みを聞いてくれない場合、その人は友達ではない」といったように（ほかにも例文をつくってみよう）。そこで、基準としてのXは「集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合」だと定義できる。

このことは、本文全体の趣旨を踏まえると、知性を属人的なものではなく、集団的なものとして定義するということになる。というのも、意味段落2のはじめに「すこしていねいに説明したい」とあり、それを受けてここまで論が展開されているからである。ここまでをまとめると、「知性を属人的なものとしてではなく、集団的なものとして定義した場合、人物鑑定を過ったことはない」という意味になる。

さらに、本文の趣旨を踏まえていくと、知性が集団的なものであることの意味が、設問（4）の解答も援用して分かってくる。他者の行動を誘発することを触媒として、集団の知的パフォーマンスを向上する」ことが、知性が集団的なものであることの意味なのであった。よってここまでだけを踏まえて、回答をまとめると以下のようになる。

知性を属人的なものとしてではなく、他者の行動を誘発することを触媒として、集団の知的パフォーマンスを向上する集団的なものとして定義した場合、「人物鑑定を過ったことはない」ということ。

それでは、一方で、「人物鑑定を過ったことはない」とはどういうことなのかを問題にしよう。これがもっとも難しいところである。なにを鑑定するのだろうか。本文最初から、「知性」「反知性主義」というのがテーマである。それゆえ、ここで鑑定されているのは、どんな人間が知性的であり、どんな人間が反知性的であるのか、ということになろう。

その鑑定内容は、本文全体（特に意味段落1）の内容を踏まえればすぐに分かる。ここでは、知的能力が優れていて、データをたくさん取り出すことができるといった一般的に思われる知性的な人のうち、自分の知的枠組みを刷新できない人のことが「反知性的」とであると定義されていた。逆に、「自分の知的枠組み」をつくりかえられる人が「知的」とであると定義されていた。

この設問は、このように本文全体でいっていたことを論理的につなげることを要求している。その構造は単純で、「知性」が「集団的なもの」として定義できれば、夜神月のような知的枠組みが固定している人間を反知性的な人間、知的枠組みが柔軟にその都度作り替えられる人間を知性的であると判断できるのである。ここまでをまとめれば、上記の〈解答〉や〈別解1〉の様な優等生的な解答ができあがる。

読解フェーズ（その2）

しかし、ここまでで受験的には恐らく十分だが、もっと深く読み込むこともできる。聡明な読者なら気付いただろうが、この傍線部は論理あるがゆえに、自己循環的である。「Aであるか否かで、Bを定義するとしたら、AでないのがBでなく、AであるのがBである」といっているだけだからである。数学であればこれでよいが、これは現代文であり、論を進めている以上、記号にはなんらかの対象があるはずなのだ。ここに気付いた人は「困った」という感想を抱くだろう。どう本文の論を説明しても、説明したことにならない、と。

ここで、B社の解答例のように「現代の日本」を持ち出して、実践的な方向に逃げることにはできる。しかし、傍線部自体の説明からはどうしても逸れてしまい、万全な解答であるとは言い難い。あくまで、気休め程度にしかならない。それでは、どうするか。

ここでは、メタレベルを一つあげてみよう。まずは、自己循環そのものを説明しよう。そうすれば、「皮肉的な受験生」答案を書くことができる。「Aと定義した以上、AはBにならざるをえない」とか、「必然的にそうなる」とか、トートロジー的な導出がなされていることを表現すればいい。このことを踏まえると、〈別解2〉の様な答案を書くことが可能になるだろう。

読解フェーズ（その3）

しかしその先がある。それは、筆者の定義そのものが、筆者の論を批判している、という構造に気付くことである。つまり、筆者の論が破綻していることを見抜くことである。傍線部は、筆者の論構造の破綻を象徴しているのである。では、それはいったいどういうことか。

筆者は、知性とは「知的枠組みを刷新できること」と定義している。そして、他者に理非の判断を委ねることのない人間を「反知性主義」としている。そうであるとするならば、その言葉は筆者の論にそのままかえってくることになる。筆者は、自分の定義にのみ基いて、論述を進めている。実際、この論考には、筆者の定義は、筆者の感覚にのみ基いて、根拠をもっていない。したがって、他者から

の批判が届かない構造になっている。筆者の定義を受け容れれば、筆者の結論を受け容れるしかない。一方、筆者の定義を批判することは、筆者が根拠を挙げていない以上できない。これでは、読者は「生きている理由がない」と同じだ。このことを本文に即して丁寧に実証するために、具体的に、筆者が、「知性」や「反知性」を定義しているところを挙げてみよう。

- 「そのような身体反応を持ってさしあたり理非の判断に代えることができる人を私は『知性的な人』だとみなすことにしている。」

- * ここでは「みなしている」（個人的に定義している）。

- 「個人的な定義だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。」

- * 個人的な定義であることを認めている。

- * 私は私をそのような気分させる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。

- * まだ「みなした」まま。

- 「だが、私はそれとは違う考え方をする。知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだと私は思っている。知性は『集合的叡智』として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。」

- * 私は思っている、私は呼ばないといった、個人的な見解に終始している。

- * 私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。

- 私は考えているという、個人的な見解に終始している。

- 「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を『知性』と呼びたいと私は思うのである。」

- * 呼びたいと思うも、個人的な見解。

- * 「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

- * ここでも、「呼びたいと思う」。

- ・ 「個人的な知的能力はずいぶん高いようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるというようなことは現実にはしばしば起こる。きわめて頻繁に起こっている。その人が活発にご本人の『知力』を発動しているせいで、彼の所属する集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまうという場合、私はそういう人を『反知性的』とみなすことにしている。」

＊ 最後まで、「みなすことにしている」。

ここまででは、筆者は独自に定義にした「知性的」「反知性的」のラベルを人々に付けてきただけである。ラベルを付けるだけなら何も問題は無い。究極的に言えば、この「知性的」というラベルは、どんな名前のラベルでも良いのだから。ただ人々をAグループとBグループに分けただけだ。

しかし、そのラベル付けによって、本件の「人物鑑定」をすることには問題が生じる。なぜなら、「人物鑑定」とは、その人に関する何かしらの真理を決定することであり、そしてそれが「誤ったことはない」と言い切るということは、その決定が少なくともこれまでは絶対の真理であり続けてきたと主張することになるからである。

最後にこの一文があることよって、論理のブーメランは投げられてしまった。独自に定義にした「知性的」「反知性的」のラベリングは、知性的であるかどうかという命題の真偽も決定することができると主張してしまったのである。「鑑定」するのが「知性的か反知性的か」ということではない場合には、ブーメランが不良品と化して筆者を救うこともあり得るのだが、先述の通り、この文章は最初から最後まで「知性的か反知性的か」という対比についてしか述べられていないので、残念ながら他のことを鑑定しているのだという読解をすることはできない。（ただし、こう言えるのは、あくまで受験問題になっているこの範囲の文章だけを読む限りであるということは付け加えておきたい。）

実際に、これが本文の最も良いまとめなのかもしれない。筆者は、自分勝手な定義をふりまわすばかりで、対話の道を閉ざしている。そこで、最後に傍線部で「過ったことはない」という傲慢な発言が飛び出す。それは自己循環的な論理に依拠しているからだと知ってか知らずか。そこを指摘できれば、きっとこの問題を出題した東大教授の真の意味を汲み取ったことになるだろう。テキストは、公のものになった以上、筆者のものではなく、読者のものになる。筆者はそのときもはや筆頭読者であるにすぎない。だとするならば、筆者も気づいていない、テキストそのものの

論理的な循環性と、メタ的な自己批判性を指摘できる者こそ真によい読者であり、テキスト解読者だということになるだろう。

問題作成者である東大教授は、このようなテキストの特性と、テキストと筆者の関係を踏まえて、問題文を選び、ここに傍線部を引き、このように作問したのかもしれない。だとしたら「さすが東大教授だ」と感嘆せざるを得ないだろう。しかし実際には、大学に入ってからはこの種の問いと向き合い続けることになるのである。私たちはただ感嘆しているばかりではいけない。この解説が楽しいと思えたなら、ぜひ大学に入って存分にテキスト解析の授業を受講していただきたい。

他社解答例の講評

[採点基準 満点12点]

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	属人的な資質・能力ではなく、	0～2点
	知性とは集団的な能力である	他者の行動を誘発することで集団の知的活動を活性化する力	0～2点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…だと定義すれば、	0～2点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自分の知的能力を過信している人間は反知性的だ	0～2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	他者と対話しつつ自らの知的枠組みを刷新できる人間が知的 OR 他者を集団的な知的営為から疎外する人間	0～2点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われている人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	…人間が知的で、…は反知性的だと正しく判断できる OR …人間が反知性的だと正しく炙り出せる OR …という判断は論理的に誤り得ない OR 筆者は…反知性的であると言わざるをえない	0～2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
(表現点)	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか		±2点

A社

答案	<p>知性とは個人の知識や情報の豊かさを言うのではなく、自分の知的な枠組みを作り替え、他者にも新たな発想や行動を促す力を言うのであって、知的能力は高くても集団全体の知的パフォーマンスを下げってしまうような人は反知性的と判断して間違いないということ。</p> <p>(120字)</p>
Schip採点	9点 (採点基準は下記を参照)

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	知性とは個人の知識や情報の豊かさを言うのではなく	2点
	知性とは集団的な能力である	自分の知的な枠組みを作り替え、他者にも新たな発想や行動を促す力 ※集団への影響まで踏み込みたい	1点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…言うのであって ※あくまで筆者の作った基準・定義であることが指摘されていない(一般的に妥当する定義ではない)	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	知的能力は高くても集団全体の知的パフォーマンスを下げってしまうような人は反知性的	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	(記述なし)	0点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われている人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	反知性的だと判断して間違いはない	1点
(表現点)	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか	(一読して意味をとることができる)	2点

B社

答案	現在の日本を考えると、自己の独善的な主張を周囲に強いる人間が知性的であった例のないことから、私たちは反知性主義者の偏った情熱に屈することなく、知性を重視して他者とともに自己刷新をつづけ、集団全体を知的に活性化していく必要があるということ。 (120字)
Schip採点	4点 (採点基準は下記を参照)

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	(記載なし)	0点
	知性とは集団的な能力である	(記載なし)	0点
	知性の定義OR知性の基準	(記載なし)	0点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自己の独善的な主張を周囲に強いる人間が知性的であった例のないこと	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	自己刷新をつづけ、集団全体を知的に活性化していく必要がある	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われている人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	現在の日本を考えると…求められている ※これでは傍線部の説明にはなっていない	0点
(表現点)	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表しているか ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造していないか	(そもそも全体の構成が全くの誤りである)	0点

C社

答案	知性とは、個々人が互いに異なる意見に耳を傾け、自らの思考枠を刷新しつつ集団の知的活動を活性化するものである以上、自己の知識を誇示し、独断的な考えを主張するだけで、他の人々の知的創造を失わせる人物が、知性的であったためしはない、ということ。(120字)
Schip採点	9点 (採点基準は下記を参照)

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	個々人が互いに異なる意見に耳を傾け、 ※直接的な言及ではないが、個人的な資質・能力はないことは暗示できている	1点
	知性とは集団的な能力である	自らの思考枠を刷新しつつ集団の知的活動を活性化するもの	2点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…である以上 ※知性の一般的な定義ではない	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自己の知識を誇示し、独断的な考えを主張するだけで、	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	他の人々の知的創造を失わせる 人物	2点
を過ったことが ない	知性的か反知性的かを正しく判断 できる OR一般的には知性的だと思われて いる人間を反知性主義だと炙り出 せる OR論理的に誤ることはない（論理 が循環している） OR筆者自身が反知性主義	知性的であったであつたためし はない	2点
(表現点)	全体の読みやすさ ・修飾語が長すぎないか ・主語と述語は対応しているか 言葉選びの正確性 ・筆者の概念を正確に表している か ・勝手に概念を捏造していないか ・勝手に概念の繋がりを捏造して いないか	(思考枠という言葉は一般的で はないし、筆者の捉える知性を 矮小化してしまう)	-1点

D社

答案	<p>知性とは、個人に属する豊かな知識のことではなく、他者の判断を受け容れつつ、他者の知の枠組みを刷新していく集団的な現象であり、集団の知的鋭意を向上させたかどうかを事後的に知性的か否かの基準とする人物評価の妥当性に、筆者は自信があるということ。 (120字)</p>
Schip採点	8点（採点基準は下記を参照）

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	個人に属する豊かな知識のこと ではなく、	2点
	知性とは集団的な能力である	他者の判断を受け容れつつ、他 者の知の枠組みを刷新していく 集団的な現象 ※集団への影響を指摘したい	1点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…であり ※これも客観的であるかのよう な書きぶり	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	(記載なし)	0点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	集団の知的鋭意を向上させたか どうかを事後的に知性的か否かの基準とする	2点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われている人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	人物評価の妥当性に、筆者は自信がある ※論理的に誤ることはないに近い解答	2点
(表現点)			0点

E社

答案	<p>知性とは他者の言説に慎重に耳を傾け、その受容を通して自らの知の枠組みを不断に更新する営みであり、自らの正しさを盲信し、他者の存在を頭から否定することで集団の知的活動を阻害する人間は、確実に「反知性的」存在とみなすことができるということ。 (118字)</p>
Schip採点	8点（採点基準は下記を参照）

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	他者の言説に慎重に耳を傾け、その受容を通して自らの知の枠組みを不断に更新する営みであり、 ※暗示している	1点
	知性とは集団的な能力である	(記載なし)	0点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…であり ※これも客観的であるかのような書きぶり	1点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	自らの正しさを盲信し、他者の存在を頭から否定することで	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	集団の知的活動を阻害する人間は	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことがない	知性的か反知性的かを正しく判断できる OR一般的には知性的だと思われている人間を反知性主義だと炙り出せる OR論理的に誤ることはない（論理が循環している） OR筆者自身が反知性主義	確実に「反知性的」存在とみなすことができる	2点
(表現点)			0点

F社

答案	現在の日本には、既成の知識や情報で全てを裁断し知識量や知的能力で自己の主張を認めさせることが知性だと思ひこむ反知性主義を排し、自他が身体性において結びつき互いに触発し更新し合うことで集団全体の知的営みを活性化する真の知性が必要だということ。 (120字)
Schip採点	4点 (採点基準は下記を参照)

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
この基準	知性は属人的な資質・能力ではない	他者の言説に慎重に耳を傾け、その受容を通して自らの知の枠組みを不断に更新する営みであり、 ※暗示している	0点
	知性とは集団的な能力である	(記載なし)	0点
	知性の定義OR知性の基準	知性とは…であり ※これも客観的であるかのような書きぶり	0点
人物鑑定	反知性的な人間の特徴	既成の知識や情報で全てを裁断し知識量や知的能力で自己の主張を認めさせることが知性だと思ひこむ反知性主義	2点
	知性的な人間の特徴 OR反知性的な人間の特徴その2	自他が身体性において結びつき互いに触発し更新し合うことで集団全体の知的営みを活性化する真の知性	2点

対応する傍線部	基準	対応する解答例の部分	得点
を過ったことが ない	知性的か反知性的かを正しく判断 できる OR一般的には知性的だと思われて いる人間を反知性主義だと炙り出 せる OR論理的に誤ることはない（論理 が循環している） OR筆者自身が反知性主義	真の知性が必要 ※傍線部と対応していない	0点
(表現点)			0点

※他社解答例の採点結果（最高点は34点）

	A社	B社	C社	D社	E社	F社
設問1	4点	5点	2点	3点	3点	2点
設問2	3点	4点	3点	3点	4点	3点
設問3	1点	2点	5点	3点	3点	3点
設問4	4点	2点	3点	2点	2点	1点
説明5	9点	4点	9点	8点	8点	4点
合計	18点	17点	22点	19点	20点	13点
得点率 (%)	53%	50%	65%	56%	59%	38%

最後に

以上のように各社の模範回答を見てきたが、模範回答が十分信頼に足るものではないことが理解できたのではないだろうか？

それはもちろん我々の回答についても言えることである。回答は常に暫定的なものである。大事なことは、自らが納得した回答を作ることである。その際には、文章中にしっかりと根拠を見つけ出すことを忘れないようにしよう。

文章をどのように読み解くか、書いてあることをどう解釈するかは、人によって差が出る。実際に、我々が回答を作る際にも解釈で揺れた箇所も沢山ある。しかしながら、一人一人の勝手な判断や思い込みを極力避けるために、与えられた文章を丹念に読み込んだ上での解釈である。

解釈の多様性は保証されるべきであるが、その解釈は共通の基盤あってこそ一人一人の解釈である。

しかしながらそのような訓練を学校ではあまり受けていないであろうから、この解説を案内としつつ、もう一度現場に立ち返ってほしい。

そして現場からくみとれるものをきちんとくみ取る訓練をすれば確実に回答作成力は上がると思われる。

やみくもに演習するのではなく、問題に徹底的に向き合って自分で納得した回答を作るように心がけてほしい。

その際には、議論することも大事である。議論することによって、このような解釈もありうるのではないか、これはこう読むのがだろうかのではないかというように、テキストの多様な側面が見えてくる。自分では思いもよらなかった解釈に出会うこともある。現代文の回答を議論することはあまりないかもしれないが、これはかなり学びになる。そして何よりも楽しい。是非一度、自分の回答をみんなで議論してみてください。学ぶこと、頭を使うことで最も重要なことは楽しむことである。勉強は楽しみながらするのが一番である。

模範回答があてにならないことは、既に分かったのだから、我々の回答も疑いつつ、さらによい答案を皆さんが書いてくれることを楽しみにしている。もし自信のある答案がかけたならばぜひ教えてほしい。

このAnchorが皆さんのフィードバックによって、より良いものに更新されて行くことを期待して、終わりとする。

引用文献・著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。

他社解答例の講評欄で言及している解答例は以下の出典より引用しております。

- 『2017年版大学入試シリーズ東京大学（文科）』 教学社編集部・編 2016年
- 『大学入試完全対策シリーズ 2017・駿台 東京大学 [文科] 前期日程(上) 2016～2012/5か年』 駿台予備学校・編 2016年
- 河合塾（総合教育機関・予備校） / 2016年度国公立大二次試験・私立大入試解答速報 <http://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/honshi/16/t01.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- 大学入試問題過去問データベース produced by 東進 <http://220.213.237.148/univsrch/ex/menu/index.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- 代々木ゼミナール（予備校） | 東京大学 前期日程の入試問題と解答例（2016年解答速報） http://sokuho.yozemi.ac.jp/sokuho/mondaitokaitou/1/kaitou/kaitou/1268938_4422.html（閲覧日：2017年2月18日）
- 東京大学 教育学部の無料受験過去問/入試問題集【スタディサプリー】 <https://studysapuri.jp/SC000073/kakomon/00000000000132501>（閲覧日：2017年2月18日）